

方言と共通語

増井典夫 (国語学)

日本の中で、伝統方言が失われていく一方で、方言を誇りに思う人が増え、東京・渋谷あたりでも仲間同士のコミュニケーション手段として方言を活用する若い世代も登場してきている(2007年頃から)。共通語使用の中での方言使用は、日本語の中の多様性や変化の一つとして捉えるべきものであろうか。

- ・田中ゆかり『「方言コスプレ」の時代』(岩波書店、2011)
首都圏若年層における三つの方言 — 本方言、ジモ方言、ニセ方言
「ジモ方言」(「ジモティの方言」 — 普段は使わない、自分より上の世代が使っている方言)
- ・『方言彼女』『方言彼氏』(2010～、三重テレビ他)
方言を使う女の子は「カワイイ」、方言を使う男の子は「カッコイイ」というコンセプトで作られた番組。

□標準語と共通語の違い

- ・標準語 こうあるべきとされる言葉。NHKのアナウンサーが使う言葉。書き言葉。
- ・共通語 日本全国で通じる言葉。

- *「見レル、着レル」や「すごい」(スゴイかわいい、スゴイきれい)などは全国的に広く使われている言葉(共通語)であるが、標準語とは認められにくいもの。
- *関西では、全国共通語の他に、地元の方言と関西での共通語(いわゆる関西弁)、計3つの段階の言語使用が認められるのではないか。

□方言とは

①その土地でしか使われない言葉

名古屋(及び岐阜)では「ヤットカメ」など

②その土地で使われる言葉全部(全体系)

[専門家の使う考え方]

「名古屋方言 — 名古屋で使われている言葉全て」を指す。

なお、一般には「～弁」(名古屋弁)(関西弁)という言い方もよく使われる。

「してチョー、あるデョー、～ダガネ、～ダデ、～ダガ」などはどうか。

「机をツル」は?

- ・名古屋言葉に関する重要人物
三遊亭円丈 (『雁道』)
清水義範 (『大名古屋語辞典』)

○方言の東西境界

『口語法調査報告書』(1906<明治39>年、文部省国語調査委員会)

仮ニ全国ノ言語区域ヲ東西ニ分タントスル時ハ大略越中飛騨美濃三河ノ東境ニ沿其境界線ヲ引キ此線以東ヲ東部方言トシ、以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ルガ如シ

この考え方だと富山岐阜愛知以西が西日本方言ということになるが、国語学者の中では、東日本アクセントとされる愛知と岐阜を東日本方言とする人も多い。(北陸地方は西日本方言)。三重県方言は近畿方言の扱い。ただし、旧長島町と木曾岬町の方言のみはアクセント等を含め尾張方言に近いとされる。

○東海地方

東海三県？東海四県？

○気づかない方言。

ビーシ (B紙?)。共通語はモゾーシ (模造紙)。

ホーカ (放課)。共通語では「休み (時間)」か「放課後」のみ。

ミエル、シテミエル (いらっしゃる、していらっしゃる)

他地方では次のようなものがある。

(北海道共通語) 「～シヨ」(～でしょう) ・イイツシヨ、ウマイツシヨ

(西日本 (中国四国九州) 方言) ・「運動会がアッテイル」(運動会をやっている) (元の方言形は「アリヨル」で「ヨル」を共通語の「ている」に直したもの)

□現代の方言、現代の共通語

日本語の中の多様性や変化の一つとしてとらえるべきものか。「新方言」「ネオ方言 (中間方言。方言と共通語の中間形)」などといったものも提唱されてきた。先の西日本方言の「アッテイル」などは「ネオ方言」とも説明される。

○新方言 (井上史雄の術語)

「若い世代に向けて使用者が多くなりつつある非共通語形で、使用者自身も方言扱いしているもの」などと定義付けられる。

・「東京新方言」

ウザイ (元はウザッタイ)

チガカタ・チゲー (違っていた・違う)

～ミタク (～みたいに)

～チッタ (～てしまった) 等々

・このうち特に「ウザイ」は「新方言」ではなく「(新) 共通語」というべきものになったか。

・一方、「ダサイ」は出所不明で、「新方言」とも呼べないものである。

・「チョー」はどうか？

「チョー」は新方言か。しかしかつてあった「チョベリバ、チョベリグ」などといったものは「流行語」と呼ばれるものだった (1995 年頃)。

(他に 1990 年代前半の「流行語」として、「ホワイトキック」、

平板アクセント=カレシ、パーティー、等々、といったものが取り上げられた)

・名古屋の新方言

ケッタ (ケッタマシン) (関西や東京ではチャリ)、などが調査された。

・沖縄の「ウチナーヤマトグチ」(ウチナーは沖縄、ヤマトグチは日本語) なども「新方言」か。

ミーグルグルー (目がぐるぐる。目がまわる)

ターガヒーガプー (誰がへをこいた。捨てぜりふに言う)